

吉田寮の「上下関係」について話してみた

南寮次郎・快樂びしゃ門天・やまうち・柔道散弾・びがる

次郎：こないだ、寮に入って、いろいろ人間関係のことについて感じ方が変わったみたいな話をしてたけど、ちょっと今日はそのへんの話について、いろいろと話してみたりしようかな。たとえば、いろんな年齢のひとが寮にはいるけど、まあそのへんとかを切り口に。

快樂：寮内のみんなが敬語を使わずにしゃべってたから誰が年寄りでとか誰が若いとかわかんなかった。

やまうち：そういう人もいたけど2・3回生の人だとはっきりと上下感が分かるというか、歳とか学年がわかるから自然と意識しちゃうけどな。

快樂：なんか、たしかに2・3回生敬語つかうひと多いね。

やまうち：それより上だと全員まとまって上って感じ。そのひとたちの上下は全然感じられないし、そのひとたちがひとまとまりみたいに見えるな。実際の上下や年齢的上下とか。

次郎：うん、目上・目下みたいなものはほとんどないけど、やっぱり「寮に入りこんでる感」のちがいは年季によってやっぱりあるかなー。

快樂：それって、年季の問題なの？

柔道：違うだろー。

びがる：誰かがいった言葉を借りるなら、「密度」？ 時間的な。

次郎：ああ、そうか、そういういいかたのいい気はするなあ。

びがる：たぶん、2・3回生がうえに敬語を使いがち、っていうのは、敬語を使う・使わないの話が寮でされなくなってきた時期が関係あるかな、と。2・3回生「に」使われがちなのは、敬語を使う対象として、高校とか、サークルとかで刷り込まれてたりというのもあるんじゃない？ それよりもっと上って寮以外であんまり会う機会ないしね。あとは、入寮当初の、「お世話する」「お世話される」と感じる体験によるのでは？

やまうち：しょっちゅうなんかを聞く相手とか、頼る相手だと、タメで話しくいかなー。

びがる：もともと敬語を使う相手って、敬うに足る「何かを与えてくれる」「何かやっててかっこ

いいな」という感じに基づいて敬い始めるものだと思う。

次郎：そのうえで、長いこと寮にいるような人間とタメで話しつつも、いろいろ教わったり触発されたりするのはすごく趣深いなあ、などとも思うよ。だから、必ずしも「すごい」イコール敬語とか上下関係にも結びつかないってことがわかるのは面白いし貴重な経験だった。10歳年上の人間にいろいろ教えてもらったりすごい影響を受けたり。それでも、気兼ねなくタメで話したり、こだわりなく遊べる相手だったり。

やまうち：上下関係っておれの語感だと、けっこう重い感じがして、すくなくとも俺の感じだと、敬語をつかうからそういう感じだという訳でもないんだよね。敬語っていっても丁寧語だけけど。

快樂：部活に入っていると、先輩は絶対に必ず上。だから敬語を使わなきゃいけない、ということが暗黙の了解としてある気がする。

やまうち：それってけっこう無理して使わされてる感とかあるの？

快樂：つかわないと、そこで「何で敬語じゃないの」と聞かれるもん。

やまうち：おれは自然と年上だったら敬語がでて、タメでしゃべりたいという気は自然と起こってはこなくて。まあ単純にそんなに親しくなかったらタメでしゃべりたいとも思わないけどなあ、そのへんなんかこの議題に対する問題意識をおれは共有してない気がする。

快樂：まあ親しくなったら敬語を使わなくなるってことかもしれないけど、それはあくまで同年代の話であって、「先輩」ってものにはどんなに仲良くなっても敬語を使わなきゃいけない空気があると思う。

次郎：敬語って、「目上」に対しても使うっていう側面もあるし、距離感の遠い相手に使うっていう側面もあるよね。そのうえで、実際には二つの側面が混ざってつかわれたりもすると思うんだけど。

快樂：だから、吉田寮では「敬語は使わなくていいよ、てか使わなくてくれた方が嬉しい」って直接言ってくれて、片方の側面が潰されているのが最初はビックリした！いまは慣れたけど。

びがる：部活の中で、すごく仲好くなった感じは共有できてるのに、敬語が続く、っていうのになんかもどかしさを感じたこともあったよ。それから、もうやめちゃったんだけど、やってた部活で、2 学年上に寮生がいたんだよね。だんだん僕が寮内で敬語を使わなくなっていく中で、そのひとにどうやって話そうかな、って迷ってた。寮内ではよく話す人だし、でも部活内では、その人との間だけならよくても、まわりの「先輩なら敬語だろ」という空気の中でタメ口はきき

にくいなあ、っていう板挟み。その頃は、部活では敬語、寮内ではタメ、っていう二重構造だった。でも部活止める直前は、僕と同回生のやつがその人に敬語を使ってる方が不自然に感じてた。その時、部活内の人と「敬語使わなくていいよ」って共有できそうにないなあ、その話をするのはしんどそうだなあ、と思って、ちょっと部活から心が離れて行ったかな。部活止めた主な理由は、単純に寮周辺でいろいろ動いて遊ぶ方が楽しかったからなんだけどね。

次郎：不自然といえば、寮で僕とふつうにタメ口でしゃべっている人の同級生が僕の研究室にいるんだけど、そのひとは僕に対してすごく丁寧に敬語をつかったり、あらたまてあいさつしてくれるんだけど、そういう二人を同時に思い浮かべてみると、歳や学年についての意識とか敬語って、ものすごい人工物なんだなーと実感したりする。

やまうち：強要されるのはもちろん悪いんだけど、強要されずに自然にできるものだったら「いい・悪い」みたいなものでなくて、「自然・不自然」っていうレベルかな。お互いにとって自然・不自然であったり、周りにとって自然・不自然というか。

次郎：うん、そのうえで自然とか不自然がどこから出てくるのかっていうと、けっきょく関係性の作り方の問題でもあるかな、と。上下関係がはっきりしているか、もしくはそのあたりが緩くて比較的対等か、とか。もちろん、部活とか研究室とか場所の関係性って頑張ってもどうしてもならないところもあったりするけど、ある程度、土壌のある寮内では、やっぱり対等な関係を目指していきたいな。もちろん、寮内でしか相手とそういう関係が築けないのは息苦しいので、寮外でもなんとかゲリラ的に頑張りたいけど。そもそも吉田寮を聖域化して、「寮のなかだから対等だ」というのもおかしな話だし。

快楽：それってでも難しくない？どうしても「寮内では」ってなりがちだなあ。

柔道：それはそうなんだけど、そう言って寮内に閉じこもるよりは、逐一その「寮内では」こうだ、ってこととか、いわゆる「普通」な場でやりとりされる「常識」だとかに違和感がある、ってことを伝えていくことが小さいけど着実に重要な一歩だと思うんだ。どうしても寮以外のコミュニティでは当然の顔をしてまかり通っていることがあるけど、それに対して違和感を感じる人がいて、ある場ではそうではない共通認識がある、ってことを知ること自体がその「常識」の中で生きてきた人にはすごいショックだったりするし。あとは、小学校とか中学校とか、そういう年頃から多分押し付けられてきたものに一度として疑問を抱かなかったか、っていうとそうでもない人もたくさんいると思うし、そういう自分自身の中にもあった疑問、違和感を思い出すこと

があればいいんじゃないかな、って思う。「敬語を使わないことがいいことだ」っていうのを押し付けるんじゃなくて、披露することでそれに触れた人自身が考えるきっかけになればいいんだから。

やまうち：強要はされるといやだけど、別に違和感を感じることはなかった。就学前からそういうしつけをされてきたからだと思うけど。それに対して、いやだと思わないし。

柔道：そういう常識をあらためて疑ってみるっていうか、それがどうして自分のなかにあるのか、なぜそれを選択しているのかということを考えるのが大学っていう時間かなあ。

やまうち：それはある気がする。あらゆることに関してそれはあるね。

柔道：んーと、つまり当然だと思って、いやだとも思っていないんだけどよくよく考えるとあれ？ っておもうことっているあると思うんだよなあ。それは当然じゃない、って主張する人の意見も知った上で、何かを自分で選択したらいいんじゃないかなあ。

やまうち：まあそういうことを常識だとか当然だとかいうふうに扱ってるひとには、単純に言うだけじゃ伝わらないかなあ。だって「常識、当然」だからね。その辺は本当に直接経験みたいな大きな衝撃がないと本当の意味では伝わらない。まあおれには伝わってないから言ってるのかな、そういうこと、はっきりしなくて悪いけど・・・

次郎：うん、だからやっぱり繰り返すけどあくまで関係性の問題で。常識とされている人間関係を、理屈で説得して変えるとかじゃなくて、ましてや「反常識」みたいなものを「吉田寮の常識」としてお題目みたいに伝えるのでもなくて、実際にいっしょに話したりちゃんと遊んだりすることそのもののなかで、こだわりのない関わり方が作られるなら、「上下関係ってほんとにくだらないな」と自然と実感できるようになってくると思う。「敬語いらない、対等にいこうぜ」というのも、お題目とか押し付けとかじゃなくて、あくまで個々人どうしのそういう関わり方が前提としてあるからこそ、かと。

やまうち：こういうふうには話しているのを見せるっていうのが意味を持つことではあるけど、そのうえで結局は自分の経験とか入ってきてから自分でどう考えるか、どういう人とどういう話をするのかというのが関わってくるから結局は継続的にいっしょに考えようぜってことになるかな。

次郎：以上の話に共感したり反発したり、そのほかにもいろいろ感じる人がいると思うけど、そういう人たちとこの続きの話ができればいいなあ。入寮する人とはこれから一緒に暮らすなか

でたくさん話をしたいし、寮に入らない人にも吉田寮に遊びに来てもらって、思うところを語りあいたいな、などと思うわけです。というわけで、このパンフを読んでいるあなたへ。僕たちはあなたを待ってます。来たれ、吉田寮へ！！